

## 資料1 説教 信仰による救い 1738年6月18日

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」。(エペソ人への手紙 2章8節)

### 序

1 神が人間に与えられたすべての祝福は、ただ神の恵みと顧みから出たものです。それは、神の無代価で、受けるに値しない者でさえ顧み、全く受ける資格のない者に与えられる顧みであって、人間は神のあわれみを少しも要求できません。「土のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなり」(創世記2章7節)、その生きものの上に神のかたちを印刻し、「万物を彼の足の下に置かれ」(詩篇8章6節)たのは、無代価の恵みでした。今日もこの同じ恵みは継続して、私たちにいのちと息と万物とを与えています。私たちの存在も、所有も、行動も、神の御手の中で何らかの価値を勝ち取ることができるようなものは何一つありません。「私たちのなすすべてのわざも、あなたが私たちのためにしてくださったのですから」(イザ26章12節。これらは無代価のあわれみの数多くの実例です。人間のうちにいかなる義が見いだされるとしても、これもまた神の賜物です。

2 それでは罪ある人が自分の罪を少しでも贖うための手段は何でしょうか。自分のわざによってでしょうか。いいえ。自分のわざがいかに多くまた聖くあっても、それは自分のものではなく、神のものなのです。まことに人間は全く汚れており、罪深い者です。ですからすべての人が新しい贖いを必要としています。腐った木には腐った実だけが生じるのです。そして彼の心は全く腐敗しており、けがらわしく、「神からの榮譽」、すなわち、彼の偉大な造り主のみかたちに従って、彼のたましいに最初に印刻された栄光ある正義を「受けることができ」(ロマ3章23節)なくなりました。従って自分たちの正しさもわざも何物も弁護できませんので、「すべての口が神の前にふさがれて」(ロマ3章19節参)しまいました。

3 もし罪ある人が神の前に恵みを見いだすことができるとすれば、それは「恵みの上にさらに恵みを受ける」ことを意味します。もし神が私たちに新鮮な祝福を注ぐことをお許しになるなら—そうです、すべての祝福の中で最大のものは救いですが—これらのものに対して「ことばに表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝します」(Ⅱコリ9章15節)と述べる以外に何を言えましょうか。そしてその通りなのです。「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちを救うために死んでくださった」(ローマ5章8節参)のです。ですから「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」。恵みは救いの源泉であり、信仰は救いの条件です。

さて、私たちが神の恵みに達しないことがないために、以下のことを注意深く尋ねたいのです。

一 私たちが救われるための信仰とは何か

- 二 信仰によって救われる救いとは何か
- 三 いくつかの反論にどのように答えるべきか

### 信仰によって救われる救いとは何か

いくつかの反論にどのように答えるべきか

1 第1に、それは単なる異邦人の信仰ではありません。それは神が異邦人に対して「神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であること」（ヘブ11章6節）を信じ、すべての事について神に感謝をささげ、隣人に対して道徳的な徳行、公義、あわれみ、真実を注意深く行なうことによって、神を崇めるようにと求めていらっしゃることを信じる信仰です。もしここまで、すなわち、神の存在と属性、報賞と刑罰についての未来の状態、道徳的な品徳の必然性までを信じないギリシャ人、ローマ人、そうです、スクテヤ人、インド人があったとしたら、言い訳はできません。これは異邦人の信仰にしか過ぎないからです。

2 第2に、それは悪魔の信仰でもありません。その信仰は異邦人の信仰よりも進んでいます。なぜならば、悪魔は恵み深く報い、正しくさばくことのできる知恵と力に満ちた神が存在するというだけでなく、イエスが神の子、キリスト、世界の救い主であることも信じています。ですから、彼が明白なことばで「私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です」（ルカ4章34節）と宣言していることを知っています。また私たちは、あの不幸な霊が聖なる方の口から出たすべてのことばを信じていることを疑えません。いにしへの聖なる人々によって記されたすべての中から、彼〔悪魔〕がああ輝かしい証しをせざるを得なくなった二人の例を挙げてみましょう。「この人たちは、いと高き神の

しもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです」（使徒16章17節）神と人との大いなる敵は、「神は肉において現われ」（Iテモ3章16節参）、主が「すべての敵をその足の下に置」（Iコリ15章25節）き、また「聖書はすべて、神の靈感による」（IIテモ3:16）というところまで信じており、信じておののいているのです。ここまでが悪魔の信仰です。

3 第三に、私たちが救われる信仰とは、このことばの意味はあとで説明しますが、キリストが地上におられた頃に使徒たちが持っていた信仰だけではありません。彼らは「何もかも捨てて、主に従う」（マコ10章28節）ほどに主を信じ、「あらゆる病苦、病弱を直す」（マタ10章1節参）ほどの奇蹟を行なう力を持っていました。そうです、「すべての悪霊を追い出す力と権威」（ルカ9章1節）を持ち、これらのすべてにまさって、彼らは神の国を宣べ伝えるために主に遣わされたにもかかわらず、なのです。しかし、彼らがこれらすべての力あるわざを行なって帰還したのちに、主は彼らを「不信仰な、曲った世」と（ルカ9章1節）お呼びになりました。悪霊を追い出せなかったのは、彼らの不信仰のゆえであると、主は語られました。しかもそれからしばらくして、すでに自分たちがいくらかの信仰を持っていたと仮定して、彼らは主に「私たちの信仰を増してください

い」(ルカ18章5節)と願いました。その時、主は明白にこのような信仰を彼らは持ち合わせていないこと、からし種一粒ほどの信仰も持っていないことを語られました。「主は言われた。『もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、「根こそぎ海の中に植われ」と言えば、言いつけどおりになるのです』と(ルカ17章5、6節)。

4 それでは私たちが救われるその信仰とは何なのでしょう。こう答えることができるでしょう。

第一に、概括的に、それはキリストを信じる信仰です。キリストとキリストを通して現わされた神が、信仰の正当な対象なのです。従って、ここにこそ、古代と現代の異邦人の信仰と、十分に、絶対的に区別する信仰があります。それは単に探索的、理知的なもの、冷たい、いのちのない同意、頭脳の中の一連の概念ではなく、心のあり方(性情)であるという点で、悪魔の信仰とは全面的に区別されるものです。と言うのは、聖書のことばによれば、「人は心に信じて義と認められ……るのです」。また「もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです」(ロマ10章9、10節)

5 そしてここに使徒たち自身が、主の御在世当時に持っていた信仰と、(救いの信仰)との違いを見ることができるところです。すなわち、後者は主の死と主の復活の必要性といさおしとを承認します。それは主の死を人間を永遠の死から贖い、主の復活を私たちすべての人をいのちと不死へと回復する、唯一で十分な手段であることを認めます。それは、主が「私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです」(ロマ四至。)ですから、キリスト教信仰は、キリストの福音全体に対する同意であるだけでなく、キリストの血潮に対する全面的な依存、主の生涯、死、復活に対する信頼、主が私たちの頼みといのちのために、すなわち、私たちのために与えられたいのちと、私たちの内に命をくださったという信頼なのです。それはキリストのいさおしによって人の罪が赦され、人が神の恩恵を受けるように和解させられ、その結果、人が主に近づき、私たちの「知恵、義、聖め、贖い」、ひとことで言えば、救いとしての主につき従うようになるとの確信です。

II 第二に考慮しなければならないことは、この信仰によってもたらされる救いとは何か、ということです。

第一に、それはどのような意味を持つにせよ、現在の救いです。それはこの信仰にあずかる人々によって獲得できるもの、すなわち、地上において事実与えられるものです。パウロもエペソにある信仰者に対して、またあらゆる時代の信仰者に対して、「あなたがたは、救われるであろう」(これも真実なのですが)とは言わず、「あなたがたは、救われた[救われている]のです」(エペ2章8節)と言っています。

2 あなたがたは(すべてのことをひとことでまとめるならば)罪から救われたのです。これが信仰によって与えられる救いです。これは神がその独り子を世に遣わされる前に、

天使によって予告されていた大いなる救いです。「その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です」（マタ1章21節）そして聖書のこの箇所であれ、他の箇所であれ、どのような制限も制約もありません。すべての神の民、あるいは他の場所で明らかに示されているように、神を信じるすべての人々を、神はすべての罪—原罪であれ、犯罪であれ、過去の罪であれ、現在の罪であれ、肉の罪であれ、霊の罪であれ—から救ってくださるのです。神に対する信仰によって、彼らは罪の責めと力から救われるのです。

3 第3は、すべての過去の罪の責めからの救いです。なぜなら「全世界が神のさばきに服するためです」（ロマ12章19節）もし神が、「誤ってしたことに厳しく目を向けられるなら、御前に立ち得る者はひとりもいません」（詩篇133:32参）。また、「律法によっては、かえって罪の意識が生じ」（ロマ3章2節）ますが、罪の赦しはないからです。その結果、「律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められない」のです。さて、「イエス・キリストを信じる信仰」によって、「神の義が」「すべての信じる人に与えられる」に至りました。今や彼らは「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスをその血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました」（ロマ3章20-25節）さて、キリストは「私たちのためにのろわれたものとなって、私たちに律法ののろいから贖い出してくださいました」（ガラ3章13節）神は「私たちに責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました」（コロ2章14節）「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」（ロマ8章1節）。

4 彼らは罪責から救われるだけでなく、恐れからも救われるのです。〔親を〕怒らせまいとする子としての恐れからだけでなく、すべての奴隷的な恐れ、「刑罰が伴」（Iヨハ4章18節）う恐れ、罰則への恐れ、神の怒りを恐れる恐れから救われます。彼らはもはや神を厳しい主人としてではなく、寛大な父親と考えます。「彼らは奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。彼らは御霊によって、アバ、父と呼びます。彼らが神の子どもであることは、御霊ご自身が、彼らの霊とともに、あかししてくださいます」（ローマ8章15-16節）。彼らはまた、神の恵みから落ちる恐れ（その可能性はないことはありませんが）、大いなる貴い約束に達することができないのではないかという恐れから救われます。彼らは「約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります」（エペ1章13, 14節）こうして彼らは「私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています……〔彼らは〕神の栄光を望んで大いに喜んでいます……〔また〕神の愛が〔彼らの〕心に注がれているからです」（ロマ5章1, 2, 5節）。さらにこれによって彼らは「こう確信しています（恐らくいつでも、また同じ充実感をもって確信しているのではないとしても）。死も、いのちも、今あるものも、後に来るものも、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、

私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」（ロマ8章38, 39節）

5 さらに、この信仰によって、彼らは罪責からだけでなく、罪の力からも救われるのです。ですからヨハネは宣言しました、「キリストが現われたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています。キリストには何の罪もありません。だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪のうちに歩みません」（Iヨハ3章5, 6節）。また「子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。罪のうちに歩む者は、悪魔から出た者です」（Iヨハ3章7, 8節）。「信じる者はだれでも、神によって生まれたのです」（Iヨハ5章1節）。また、「だれでも神から生まれた者は、罪のうちに歩みません。なぜなら神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちに歩むことができないのです」（Iヨハ3章9節）。

さらに、「神によって生まれた者はだれも罪の中に生きないことを私たちは知っています。神から生まれた方が彼を守ってくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです」（Iヨハ5章18節）

6 信仰によって神から生まれた者は罪を犯しません。すなわち、（1）いかなる常習的な罪も犯しません。なぜならば、すべての常習的な罪は支配する罪だからです。しかし、信じているいかなる人も罪は支配することはできません。（2）いかなる意図的な罪も犯しません。なぜならば、信仰に留まっている限り、彼の意志はすべての罪に対して全面的に反対しており、罪を死の毒のように嫌悪するからです。（3）また、いかなる罪深い願望によっても罪を犯しません。なぜならば彼は絶えず、神の聖く完全なみこころを願望するからです。また彼は神の恵みによって、不浄な願望が生まれようとする時、それをふみつぶします。（4）またこのとき、行いにおいても、言葉においても、思いにおいても、弱きによって「罪を犯す」という表現は不適當でしょう。なぜならば、彼の弱点は彼の意志と併在せず、この意志の働きなしには、弱点は正当な意味で罪ではないからです。こうして、「神から生まれた者は、罪のうちに歩みません」（Iヨハ3章9節）。彼は自分が「罪を犯したことがない」とは言えませんが、今は「罪を犯さない」のです。

7 これこそが現世にあって、信仰による救いなのです。罪と罪の結果からの救いであり、この両者はしばしば、「義認」—それは最も広い意味では、今、キリストを信じている罪人のたましいに具体的に適用される、罪責と刑罰からの釈放を意味します—と罪の力からの釈放—すなわち、心「のうちにキリストが形造られる」（ガラ4章19節）ことによって—ということばによって表わされています。その結果、このように義とされた人、あるいは信仰によって救われた人は、たしかに「新しく生まれ」た人です。彼は「御霊によって生まれ」（ヨハ3章5節）、「キリストとともに神のうちに隠されてある」（コロ3章2節）新しいいのちを与えられます。そして「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求め、それによって成長し」（Iペテ2章2節）、神である「主」にあって、その大能の力によって強められ」（エペ6章10節）、「信仰から信仰」（ロ

マ1章17節)、「恵みから恵み」(ヨハ1章16節)へと進み、「ついに、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達する」(エペ4章13節)のです。

### 三

このことに対する反対は、通常、次のようであります。すなわち、

1 信仰のみによる救いあるいは義認を説教することは、きよめと良いわざに反対することを説くというのです。これに対しては、短い答えで十分でしょう。すなわち、もし私たちがこれらのことと切り離して信仰を語り、実践するならば、そのとおりと言えるでしょう。しかし、私たちはそうでない信仰、すべての良いわざとすべてのきよめを必然的に生み出すような信仰を説いているのです。

2 しかしこのことをもっと全面的に考慮することは有益でしょう。特にこれは新しい反対ではなく、パウロの時代から続いているのですから。と言いますのは、その頃でも「信仰によって律法を無効にすることになるのでしょうか」(ロマ3章31節)と質問されていたからです。第一に、私たちは答えます、信仰を説かないすべての人は、明らかに律法を無効にすると。それは直接的、総体的に、「聖書の本文のすべての精神を食いつくしてしまうような制約や注釈によって、また間接的に、これを実行することを可能にする唯一の手段を指摘しないことによってです。ところが、第二に、私たちは律法の十分な範囲と霊的な意味を示すことによって、またすべての人を「律法の要求が全うされる」(ロマ8章4節)生きた道へ招くことによって律法を確立するのです。彼らはキリストの血だけに信頼しながら、神が定めてくださったすべてのいましめを守り、神が「私たちが良い行ないに歩むように、あらかじめ備えてくださった」すべての「良い行ない」(エペ2:10)を行い、あらゆる聖い、天的な気質、すなわち、「キリスト・イエスのうちにあるのと同じ心」(ピリ2章5節 英訳)を喜び、表すのです。

3 しかしこの信仰を説くことは人々を高慢に導くでしょうか。私たちは答えます、それは偶然あるかもしれませんが。従ってすべての信仰者は(偉大な使徒のことばのとおり)真剣に警戒しなければなりません。「彼らは不信仰によって折られ、あなたは信仰によって立っています。高ぶらないで、かえって恐れなさい。もし神が台木の枝を惜しまれなかったとすれば、あなたをも惜しまれないでしょう。見てごらんください。神のいつくしみと喜びしさを。倒れた者の上にあるのは、喜びしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです」(ロマ11章20-22節)。またここに留まっているかぎり、「それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行ないの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです」(ロマ三)という、パウロがこの反対を予見し、答えているこれらのことばを思い起こすでしょう。もし私たちが行いによって義とされる

のであれば、私たちがそれによって誇るでしょう。しかし「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら」（ロマ4章5節）、誇るどころは何もありません。この本文に先行し、また伴うことばも同じことを述べています。「あわれみ豊かな神は、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、—あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです—それは、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかにお示しになるためでした。あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」（エペ2章4、5、7、8節）。自分自身からは、信仰も救いも生じません。

「それは神からの賜物です」（エペ2章8節）。あなたがたが救われる信仰も、無代価で受けるに価しない賜物であり、神がご自分の喜びなさるままに、神の顧みによってのみ与えられる救いも、これと結びついているのです。あなたがたが信じるということは神の恵みの一例であり、信じることによって救われるということはもう一つの例です。「行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです」（エペ2章9節）。なぜならば、私たちが信じる前のすべての行ない、すべての義は、神から断罪を受ける以外の何物でもありませんでした。それは信仰を受けるに価するものとはほど遠くありました。

ですから、信仰が与えられるのはいつであっても、「行ないによるものではありません」。また私たちが信じる時、それは私たちが行うわざによる救いではありません。私たちの「うちに働いてくださるの」は神だからです（ピリ2章13節）。従って、神ご自身だけが働いてくださることの故に、神が私たちに報いを与えられるということは、神のあわれみの豊かさを表すもので、私たちには誇る余地が何もありません。

4 しかしながら、神のあわれみを信仰だけによって無代価で救ったり、義と認めたりすると語ることは、人々が罪に留まることを励ましたりはしないでしょうか。たしかに、そうでしょうし、そうなるかもしれません。多くの人々は「恵みが増し加わるために罪の中にとどまる」（ロマ6章1節）でしょう。しかし彼らの血は彼らの頭上にかかっています。神の慈愛は彼らを悔い改めに導かなければなりません。そして心の真実な人々はそのとおりになるでしょう。彼らは神に赦しがあると知って、イエスに対する信仰によって彼らの罪が消し去られるようにと叫び求めるでしょう。そしてもし彼らが熱心に叫んで気落ちしないならば、もし神が定めてくださったすべての手段を用いて求めるならば、もし神が来られるまで慰められることを拝もうとするならば、主は来られ、遅くなることはない」（ヘブ10章37節）のです。また神は短期間に多くのわざをなさいます。使徒の働きの中には、稲妻が天からくだるように速やかに神が人々の心の中にこの信仰を働かせなさるといふ多くの実例があります。

パウロやシラスが説教し始めると同時に、看守は悔い改め、信じ、バプテスマを受けましたし、ペンテコステの日にペテロの最初の説教によって三千人がみな悔い改めて信じたのもそうでした。また、神は賛むべきかな、神がなお「救うに力強い者」（イザ63章1節）であられるという多くの生きた証拠が今も存在しています。

5 しかし他の観点から見れば、全く正反対の論議がこの同じ真理についてなされま  
す。「もし人が自分のなし得るすべてによっても救われないとすれば、それは彼を絶望に  
追いやるのではありませんか」。たしかに、自分自身のわざや自分自身の功績や義によっ  
て救われることには絶望するでしょう。

またそうでなければなりません。なぜならば、自分自身のいさおしを徹底的に否定する  
までは、だれひとりキリストのいさおしに頼ることができないからです。「自分自身の義  
を立てよう」（ロマ10章3節）する人は、神の義を受け入れることができないのです。  
律法による義に頼っている間は、信仰による義が与えられないのです。

6 しかしこれは不安をもたらす教理であると言われていています。悪魔は人々にその通り  
であると示唆するとき、悪魔らしく、すなわち、真理も恥らいもなく語っているのです。  
これはすべての自己を破滅させ、自己を責めている罪人にとって唯一の慰めに満ちた教理  
であり、「慰めに満たされ」（11コリント7章4節）主は「すべての人の主であり、主  
を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられる」（ロマ10章12節）のです。ここ  
に天に届くほど高く、死よりも強い慰めがあります。何ですって、すべての人に対して恵  
み深くあられるのですか。公然たる罪人ザアカイにも、公然たる遊び女であったマグダラ  
のマリヤにもですか。私が思いますのに、「では私、私のような者でも恵みを望むことが  
できるのですね」と言う人のことばが聞こえてきます。神はあなたの祈りを退けなさいま  
せん。そうです、次の瞬間に、「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された」（マ  
タ9章2節）と言われるでしょう。その罪はもはやあなたを支配しないほどの赦しが与え  
られるでしょう。そうです、そして「あなたが神の子であることは、御霊ご自身が、あな  
たの霊とともに、あかししてください」（ロマ8章16節）。ああ、よろこばしき  
おとずれよ。すべての人に伝えられる大いなる喜びのおとずれよ。「ああ。渇いている者  
はみな、水を求めて出て来い。金のない者も。……金を払わないで、……代価を払わない  
で、……買え。」（イザ55章1節）。あなたの罪がどのようなであっても、たとえそれが  
「緋のように赤くても」（イザ1章18節）、「あなたの頭の髪の毛よりも多く」（詩篇  
40篇12節参）あっても、「主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たち  
の神に帰れ。豊かに赦してくださいから」。

7 もはや反対論が起らなくなったとき、私たちが聞かされることは、信仰のみによる  
救いは、優先的に教えられるべき教理ではないとか、少なくともすべての人に伝えられる  
べきではないとの声です。しかし、聖霊は何と語っておられるでしょうか。「すでに据え  
られている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエ  
ス・キリストです」（1コリ3章11節）。ですから「彼を信じる者は、救われます」（ヨ  
ハネ三章参、これがすべての私たちの説教の土台でなければなりません。ですからこれが  
優先的に説教されなければなりません。「よろしい、でもすべての人に対してではない」  
と言われるのですか。それならばだれに対して説教してはならないのでしょうか。だれを  
除外すべきでしょうか。貧しい人々ですか。いいえ、彼らは福音を宣べ伝えてもらう特別

な権利を持っているのです。無学の人々ですか。いいえ、神は初めからこれらの事を無学の人々、無知の人々に示してくださいました。若い人々ですか。決してそうではありません。どのようにしてでも「彼らをキリストのところに来させなさい。止めてはいけません」(マコ10章14節参)。罪人たちですか。とんでもないことです。主は「正しい人を招くためではなく、罪人を招くために」(同2章17節)来られたからです。では、除外するとすれば、富者、学者、名士、道徳家を除外するべきでしょうか。彼らがしばしば聞くことを自ら拒んでいるというのは事実です。しかし私たちは主のことばを語らなければなりません。なぜなら、私たちに与えられた命令の基調は、「出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい」(マコ16章15節)です。もしだれであっても、その命令あるいはその一部をねじ曲げて滅びに至らせたら、彼は自分の重荷を負わなければなりません。しかもなお、「主は生きておられる。主が私に告げられることを、そのまま述べ」(I列王22章14節参照)なければなりません。

8 今の時代に私たちは、特に「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」ということを語らなければなりません。なぜならば、この教理を主張することが今日ほど時にならなっている時はないからです。私たちの間でローマ教会〔カトリック〕による惑わしの増大を効果的に防ぐためには、これ以外にありません。ローマ教会のすべての誤りをひとつひとつ責めるのは際限のないことです。しかし信仰による義認は根底を撃つことであり、すべてを堅立している土台が倒すこととなります。この教理を英国国教会が「キリスト教宗教の強固な岩であり基盤である」と呼んでいるのは正統です。この教理こそ、この王国からカトリック主義をまず駆逐し、これだけが今もそれを続けているのです。この地を洪水のように覆っていた不道徳を阻止し得たのは、これ以外の何物でもありません。あなたがたは深いふちを一滴ずつ空にすることができますか。もしできるなら、あなたがたは特定の悪をとどめることによって改革をすることができます。しかし「信仰に基づいて、神から与えられる義」(ピリ3章9節)が導入されるとき、高慢な波はとどめられます。これ以外の何物も「自身の恥」(同)を誇りとし、「自分たちを買い取ってくださった主を否定する」(IIペテ2章1節)人々の口をふさぐことができません。彼らは、神によってその心に律法を書いてくださった方のように、律法について気高く語ることができます。この主題について語っているのを聞いていると、彼らは神の国から遠くないと考えさせます。しかし彼らを律法から福音へと移してごらんください。信仰による義、「信じる人〔を〕みな義と認め」させる「律法を終わらせられた」(ロマ10章4節)キリストから始めてごらんください。そうすれば、今、全面的なクリスチャンではないとしても、ほとんどクリスチャンと見えている人々が滅びの子と告白せざるを得ず、地獄の深さが天の高さと隔たっているのと同じように、彼ら(神よ彼らをあわれんでください)はいのちと救いから遠ざかっているのです。

9 この理由から「信仰による救い」が世に対して宣言されるときはいつでも、敵は怒り狂います。

この理由から〔この教理を〕優先的に説教した人々を滅ぼそうとして、天と地を動員するのです。またこの同じ理由から、彼は信仰だけが彼の王国の基を覆すことを知っているのです、その全勢力を招集し、その偽りと中傷のすべての技術を動員し、万軍の主のあの輝かしい闘士であるマルチン・ルターが〔この教理を〕復活させるのを脅かそうとしたのでした。私たちはそれに驚くことはできません。

なぜならば、かの神の人は「高慢で強い男が、手に一本のを持って彼を阻止し、倒そうと向かってきた幼子にどれほど腹を立てたことか」と述べています。そのとき彼はその幼子が、たしかに彼を倒し、彼を足の下に踏みつけるであろうと知っていたのです。「アーメン、主イエスよ」（黙示22章20節）。

こうしてあなたの力は「弱きのうちに完全に現われるから」（Ⅱコリ12章9節）です。ですから、主を信じる幼子よ、前進しなさい。そうすれば、彼の「右の手は、恐ろしいことをあなたに教え」（詩篇45章4節）るでしょう。あなたは幼い時のように、無力で弱くあるとしても、あの強い男はあなたに立ち向かえないでしょう。あなたは彼に勝ち、征服し、覆し、足もとに踏みつけるでしょう。あの偉大な救いの君のもとで前進し、あなたのすべての敵が滅ぼされ、「死が勝利にのまれ」（Ⅰコリ15章54節参）で、「勝利の上にさらに勝利を得ようとして」（黙示6章2節）前進しなさい。

さて、私たちは私たちの主イエス・キリストによって勝利を与えてくださる神に感謝をささげましょう。父なる神と聖霊とともに、主イエス・キリストに祝福と、栄光と、知恵と、感謝と、ほまれと、力と、勢いとが、永遠にありますように。アーメン。